

『稿本天理教教祖傳』には、教勢進展状況と教史に名を遺す有力な信者たちの出現状況が、平行的に記されています。

先ず、43 頁には、「二十数年に亙る長いみちすがらの後、漸く親神の思召が広まり始めた」とあり、次の 44 頁には、「親神の御名はいよゝゝ広まり、後によふぼくとして勤めた人々が、次々に引き寄せられて親里へ帰って来た」と記され、続いて文久年間（1861～1864）に入信した数人の名前が記されています。そして、次の 47 頁には、元治元年（1864）の春から、教祖が熱心に信心する人々（50～60 人）に、“扇のさづけ”を渡されたことが述べられ、「さづけ」をいただいた 6 人の名前が挙げられています。

また、67 頁には、慶応年間（1866～1867）に、「近郷近在の百姓達だけではなく、芝村藩、高取藩、郡山藩、柳本藩、古市代官所、和爾代官所等、諸藩の藩士で参詣する者も続々と出て来た」と記されています。

続いて明治初期については、107 頁に、「明治三年、四年、五年と、珍らしいたすけは次々に現われ、親神の思召は大和の国境を越えて、河内、摂津、山城、伊賀と、近隣の国々へ広まった」と記され、150 頁には、「(明治 13 年に整頓された講社名簿) 第一号から第五号迄は大和国、その人数は五百八十四名、第六号から第十七号迄は河内国、大阪、その人数は八百五十八名、しめて一千四百四十二名である」とあります。また、250 頁には、「明治十五年三月改めの講社名簿」にある大和国 5、河内国 10、大阪 4、堺 2 の講社名が記されると共に、それ以前からあった 7 つの講社名も記されています。そして、「当時、講元周旋の人々は、山城、伊賀、伊勢、摂津、播磨、近江の国々にもあり、信者の分布は更に遠く、遠江、東京、四国辺りにまで及んだ」と記されています。

また、続いて、296 頁には「道は、(明治 19 年までの) こゝ数年の間に更に広まり、先に誌したものに加えて、徳島、静岡、京都、兵庫、大阪、東京、奈良の各県に 12 の講社ができた」と記され、330 頁には、明治 20 年 1 月 26 日のおつとめに、「参拝人が非常に多く、その数は数千に達した」との記述があります。

そして、この教勢の進展につれて、教祖の高弟たちが文久間に 6 人、元治元年〈一般的には、元治は“げんじ”と読まれる〉には 8 人、明治 1～9 年に 11 人、明治 10～19 年に 25 人、合計で 50 人が入信したことが、個別の名前を挙げて記されています。50 人の名前というのは多いように感じるかも知れませんが、その間の信者の分布の拡がりや講社数・信者数の増加の様子からすれば、少なくとも万を超える信者がいたはずですので、(地方で信仰・活躍して、本部には名前が知られなかった人が多数あるとしても)『教祖伝』に記されている人数はかなり少ないといえましょう。

例えば、慶応 3 年 4 月～5 月までに記された「御神前名記帳」(『教祖伝』には不掲載)にある延べ千数百人の名前と、13 年後の明治 13 年の「転輪王講社名簿」にも載っているのは十数名に過ぎない(高野友治『教祖 おおせには』212 頁)といわ

れますが、文久元年～明治 12 年の入信で、『教祖伝』に名前があるのは 20 数人。文久年間以後にできた千人以上の信者のほとんどが霧散しているのです。

また、明治 14 年以後の入信で『教祖伝』に名前のあるのも 20 数人ですが、それも、同 20 年 1 月 26 日のおつとめに数千人の参拝、続く教祖御葬祭には全国から無慮 5 万人以上が寄り集ったと記される(『稿本中山真之亮伝』55 頁)ところからすれば、極めて少ない人数です。

つまり、教祖ひながたの後半の 25 年間には、教祖のおたすけに浴して引き寄せられた人が急速に増えたけれども、数年も経てば信仰から離れてしまう人がほとんどでした。しかし、その中から、本物の信仰をつかんで残る人、代を重ねて信仰を続ける家が少ないながらも出てきました。そして、(もちろん教祖による不思議・珍しい救済があつてこそですが……)それらの人たちの活躍によって、離れていく人に倍する新しい信者が輩出されたので、教勢がさらに拡大していったということでありましょう。

この教祖の高弟たちの入信時の年齢をみますと、10 代＝6 名、20 代＝9 名、30 代＝18 名、40 代＝13 名、50 代＝3 名、60 代＝1 名で、平均年齢は 33.98 歳です。教祖の年齢からみますと、御年 64 歳～70 歳の間に 14 名、71 歳～79 歳の間に 11 名、80 歳～89 歳の間に 25 名の入信ということですから、つまり、高弟たち 50 人のほとんどが、教祖とは親子・孫子に等しい年齢の青年期・壮年期に入信しており、その中の半数が、教祖の御年 80 歳～90 歳の間の入信ということなのです。

さて、この教祖伝の事歴を、今の我々に当てはめて考えますと(ひながたの 50 年を丸ごと通れとは仰せになってはいませんが……)先ず申せるのは、若い布教師ではなかなかすぐには信者ができないということでしょう。“ひながた”の前半分は、いわゆる“たすけ放し”ですから、布教師としての年齢を重ねることが大事だということなのです。

そして、次に言えるのは、布教道中には多くの人の出入りがあるということ。熱心に信仰している人が突然いなくなったりしても、必要以上に悲観しなくてもよく、本物の信仰者が見つかることを楽しみに、自分より若い世代をしっかりと育てればよいということでしょう。教祖は 25 年で 50 人の高弟。一代で大教会長になられた先人は、“自分が本当にたすけたのは 7 人、それで大教会長になった”と言われていましたが、天才でない布教師は、“生涯かけて数人の真実の信者・本物の弟子が授かれれば結構”と思って通ればよいのです。

今の社会では、60～65 歳で定年だとされますが、(歴史に if はないのですが……)教祖が、もし仮に御年 60 歳(安政 4 年/1857)でリタイアされていれば、上記の教勢の進展も高弟たちの輩出もなかったでしょう。教祖が、現在の後期高齢者といわれる年代になられて後に、それ以前のご苦労の果実が稔っているのです。平均寿命が延びた現代でこそ、布教師が年齢を重ねる値打ちが増しているとも思う次第です。